



TITLE:

<批評・紹介>満和辭典 羽田亨編

AUTHOR(S):

石濱, 純太郎

CITATION:

石濱, 純太郎. <批評・紹介>満和辭典 羽田亨編. 東洋史研究 1938, 3(3): 243-245

ISSUE DATE:

1938-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145606>

RIGHT:

批評・紹介

滿和辭典

羽田 亨編

昭和十二年十二月・京都帝國大學滿
蒙調査會刊・菊判五〇〇頁・定價五圓

滿洲語の研究は清朝に接觸した耶蘇會士等によつて始められた。固より當時の實用語學としても必要であつたんだが、實は之に依つて支那文化一般の理解に資せんとしたのもあつた。會士等の支那文化研究が漢字漢文の困難に衝突してゐた際に、彼等の必要とした漢文書類が相當多量に滿洲語譯されて居り、文字こそ異なつて居れども標音式であつた語學習得の容易さによつて、支那文化研究に滿洲譯書の比較参照の便益なるを覺り、遂に歐洲の東洋學者をして競つて滿洲語學習得に走らしめたのであつた。かくして忽ちにして文典辭書讀本の編纂が続々として起つた。その爲めには支那で編纂出版されてゐた滿文語學書類は頻りに研究翻譯されて歐文となつたものである。特に辭典を擧ぐ

れば、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ* (Dictionnaire Tartare-Manchou français, composé d'après un Dictionnaire manchou-chinois, par M. Amyot, rédigé et publié avec des additions et l'alphabet de cette langue, par L. Langlès, 3 tomes, Paris, 1789—1790.)、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ* (Sse-schu, Schu-king, Schi-king in Mandschuischer Uebersetzung mit einem Manschu-Deutschen Wörterbuch, herausgegeben von H.C. von der Gabelenz, Abhandlungen der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft, III. Band, No. 1, Leipzig, 1864.)、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ* (V. Vasil'ev: *Man'žursko-russkij slovar'*, St.-Peterburg, 1866.)、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ* (I. Zacharov: *Polnyj man'žursko-russkij slovar'*, St.-Peterburg, 1875.) の如き諸刊本以外に、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ*、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ*、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ* (Cf. Catalogue des livres composant la bibliothèque de feu M. Klapproth, Deuxième Partie, p. 53—54, Paris, 1839.)、*ᠮᠤᠨᠤᠰᠤᠳᠤᠰᠤᠨ* (Cf. Langlès: *Alphabet tartare-manchou, dans le dictionnaire de M. Amyot, p. XXXIII. A. Wylie: Translation of the T'ing Wan K'e Mung, a Chinese grammar of the Manchu Tartar Language, with*

introductory notes on Manchu Literature. Shanghai, 1865. p. Iii.) などの未刊の稿本などがある。然し此等の辭典は稿本は論外だが、刊本も稀購に屬して入手し難い上に、アミオは清文彙書の不完全な翻譯であり、(Cf. Klappert: Mémoires relatifs à l'Asie. Tome III. p. 9—16, Meadows: Translations from the Manchu, with the original texts, prefaced by an essay on the language. Canton, 1849. p. 29—31.)、ザンロフは清文鑑清文彙書を主としたものだし、(E. V. Zach は再三の補訂を試みてゐる)ガベレンツは四書書經詩經の語彙であるから、例へば佛露獨の語に通じてゐても支那文化の影響の多い滿洲文語では此等の漢譯の對照を闕いだものでは眞意を捕捉し難い。だから稀購の辭典も實はアルファベット式で搜索し易いと云ふ程度の語彙に過ぎなかつた。其後歐洲の滿洲語學も、支那學補助手段としてそれ程の價值あるものでない事が分り、實用語としても支那語とは到底比較にならず、歐洲學者の漢字克服も進んで來ては殆んど顧みられず、極めて少數の特殊學者の參考に供せられるのみで、寧ろ支那學者よりは蒙古學者などの手に移つて行き、専門的著

述も間歇的に現はれるに過ぎなくなつた。

我國の滿洲語學は割に古く、高橋景保の如き偉才を有するを誇りとしてもいゝのであるが、景保の翻譯編纂した辭典も長崎通事の辭典も稿本の儘で學界に裨益を與ふるに至らなかつたのは時勢上致方もなかつたらう。此等の辭典も矢張り清文鑑が底本であつた。明治以後東洋史家言語學者の間に滿洲語に興味を有する人もあつたが、西洋學者に追隨してゐた間は、既に歐洲で頽勢であつた斯學に従事する人はなく、一の老學者渡部蕪太郎先生を奮起せしめ、清文彙書の譯述稿本を留めたのみであつた。たゞ世の清朝史研究を終生指導せられた内藤湖南先生は多大の關心を以て斯學を修め資料の蒐集請來、研究の示唆獎勵に努力されてゐた。その傳統を紹ぐ京大東洋史研究室は老檔實錄の研究に沈潜し、我國の滿洲語學は必ず此處に發するを豫想せしめたのであつたが、果然羽田先生の鑑修の下に辭典編纂は企圖せられ、かくて助纂者の非凡の努力によつて滿和辭典を我學界に贈るに至つた。

本辭典は諸清文鑑清文彙書の語を類次譯述したものであるから、歐洲、我國の諸學者の先蹤を襲うたに過ぎ

ない様であるが、實は先業を精確に集大成をしたと見るべきものである。その編纂の苦心等は史林第二十三卷第一號の鴛淵先生の紹介に見えるが、我等は今にして先業の増訂完成版を有するに至つたのである。かくて久しく顧みられなかつた滿洲語學は新しき出發點を茲に於て持つであらう。滿洲史料の研究も茲に於て新しき工具を見出すであらう。豈に只我國學界のみならず、歐洲滿洲支那の學界も此書の出世に於て新しい滿洲學を知るに至らう。

我國の滿洲語學は先蹤を踏んで辭典を以て再び現出したが、今よりは史學は固よりであるが語學に於ても世界の權威として確立されねばならない。滿洲語は文語としても最近その存在を抹殺せらるゝ様になつたらしいが、學術界に於ては無用視されてはならない。滿洲國の語學的調査も學術的立場に於て急速に實施されねば、動いてゐるこの時代を經過してつては後悔するに至らう。單なる文語語彙ではあるが、この増訂新版の出現を機として滿洲語學の躍進を期待したい。それが東洋文化開發に對する我國學界の義務であらう。此等の語を以て本書紹介の辭とする。(石濱純太郎)

金代女眞の研究

三上 次男著

昭和十二年十二月日滿文化協會發行
四六倍版・五五六頁・索引・附圖・
頒價五圓五拾錢

本書の惠與をうけたのは舊臘も押迫つた二十八日のことで、懇到なる池内博士の序文を以て卷頭を飾り、本文五百五十六頁に索引及び多彩刷の附圖を添へた堂々たる大書冊を手にしては、著者の驚くべき努力をまづ感じた。同じ方面の研究に志す者としての異常なる興味と昂奮とを以て、歳末歲始の數日を本書の讀破にあてたことは言ふまでもない。左に簡單に本書の紹介を試み若干讀後の感想を附加へたいと思ふ。本書は二篇の論文より成り、第一篇は『完顏阿骨打の經略と金國の成立』(一二四頁)、第二篇は『猛安謀克制の研究』(四三三頁)と題し、ともに昭和八年以降著者が滿蒙文化研究員として研鑽を積んだ輝しき成果である。

第一篇『完顏阿骨打の經略と金國の成立』は、池内博士の『金史世紀の研究』の後を承けて、遼天祚帝の天慶四年獨立の旗幟を掲げた生女眞完顏部の酋長阿骨打が、次第に遼の版圖を經略して金國を建設するに至

る反對史料に論及して居ない點も甚だ物足りない感がある。これ等は著者としても再考察を要する點ではなからうか。

又從來女眞史の專攻者の間に於いて屢企てられ乍らその煩雜なるがために放棄されて居た猛安謀克名の蒐

バグダツト旅信

宮崎 市定

九月七日イスタンブルに着き此處が大へん氣に入りましたので十日程滞在し海峽を越えて、小亞細亞に渡りアンゴラに一日、古城の外に別に見る可きものなく、汽車の都合でカイゼリーといふ小都市に一日滞在しました。北京などよりもつと埃っぽい汚い町でした、それから汽車にゆられること一晝夜、シリアアレツボ着、此の地方第一の大都會で古い城郭が残つてゐたり博物館があつたりして割合に面白く四日間を過しました。旅行に出る時はイラクに入る考は毛頭なかつたのですが、砂漠に誘惑されて土耳其のバグダツト鐵道に乗り、イラク國境迄來、自動車にのりかへてモスルに到着しましたこの汽車は何か平緩線といつたやうな感じのする田舎鐵道で一週に二回しか動きません。時間表はあれどもなきが如く、まるで一晝夜荒漠たる平野を走りつゞけて人も荷物も埃まみれになつて、チゲリス河畔モスルについた時はホツとしました翌日早速對岸のニネブを訪ひましたが、土山があるばかりで何もなく失望しました。町の北方にアラビア時代の門や城壁が残つてゐるものゝ方がすつと興味を惹きました。町の中を歩いてゐる中、二丈程の高きの斷崖あり、ベルンヤ陶器の破片を澤山含んでゐるのを發見し表面採集——名バタヤを行ひ大ぶん集めました。勿論、形のまとまつたものなどなく、美

集、その冠稱と先住地名との比定(多少の疑問はあるも)等は、今後一層深めらるべき女眞史の研究に多大の便宜を與へるものとして學界は擧つて著者に感謝すべき點であらう。尙卷末に索引を附せられたことは大いに著者の勞を多とすべきである。(小川裕人)

術的の價値は零ですが、同じ青綠釉のものばかり隨分古い時代のものから現代のまで連續して見られる様ですから、製陶業の發達を見るにはよい材料になるかと思ひます。併し何分重いのので捨てゝ了はうかと思ふこと屢々あり、果して持つて歸れるかどうか疑問です。(中略)自動車に飛びのつてバグダツトに向ひました。所がこの自動車。貨物自動車に腰掛をうちつけたもので、動搖すること一方ならず、前進するよりは上下に動く方が多いと云ふ代物です。アラビヤ人と一しよに牛馬同様にすみこまれ身動きもならず、夜の十一時に着くといふ話したつたのが翌日の晝頃になり、結局一晝夜、漕刑囚の苦役を嘗めました。全身に打撲傷が數ヶ所出來たやうでした。(中略)バグダツトはアツバス朝のものが澤山に残つてもゐると思ひきや、市街の外郭も分らぬといふ狀態でそれも來て見て分りましたが、凡てが軟い粘土を軟く焼いた煉瓦を材料にしてゐるので一度瓦解すれば一朝に泥土に歸するといふ狀態で都市の膨張も早い代りに没落も徹底的なのでせう。この附近みな石を用ひぬ泥だけの建築にて、ペビロンにしても大したものなく、寫眞で見てどんなに綺麗かと思ふものゝ實物を見ると粘土細工なものには全く失望してしまふ。この土地アラビヤ人の尤も人氣悪い所にバタヤもうつかり出來す何の收穫もありません。バストラへ行くには日數もかかり、明唐宋の銅錢が落ちてゐるさうにもないので之はやめました。明朝當地發又一晝夜砂漠の旅をつゞけてダマスカスに入ります(十月十六日 羽田教授宛)